
【論考】

非連続の筆致——『触覚』におけるデリダのドゥルーズ批判をめぐって⁽¹⁾

小川歩人

はじめに

哲学者ジャック・デリダは、かつてドゥルーズを「この「世代」に属するあらゆる人々の中で私にとって最も近い立場にいると思われた人物」と評した（CFU235/131頁）。互いに積極的な言及は少なかったが、共に「差異」を主題とした二人の「近さ」（あるいは遠さ）は、折に触れ、さまざまなかたちで論じられてきた。しかし、にもかかわらず、両者の哲学的背景、語彙選択の決定的な異質さは、この二人の関係を論じることを今なお困難にしている。

本論では、両者の関係を論じる際に、デリダがむしろドゥルーズとの齟齬をきたす場面について、ドゥルーズの生前に予定されていた対談企画での最初の質問として用意されていた「器官なき身体」読解に注目したい。追悼文ではあくまで問いの方向性が提示されたのみだったが、デリダはその後、『触覚——ジャン・リュック＝ナンシーに触れる』（2000）内で『千のプラトー』（1980）第14プラトーの「平滑空間 [l'espace lisse]」および「触知的 [haptique]」概念の検討を通して、ドゥルーズ／ガタリの「器官なき身体」解釈への批判をおこなっている。本論では、この『触覚』から出発し、ドゥルーズ／デリダにおける連続／非連続という対立軸について明らかにすることを目的とする。

議論の道筋を示しておこう。まず、デリダの『触覚』における問題設定、ドゥルーズ／ガタリが組み入れられる「触覚中心主義 [haptocentrism]」について概観する。次いで、中心的主題となる「器官なき身体」に関する60年代のデリダの解釈を提示する。その後、デリダが賛意を示す60年代のドゥルーズの著作から出発して、批判の矛先となる器官なき身体の連続主義が全面化していく『アンチ・オイディプス』（1972）、『千のプラトー』を検討していく。最終的に、ドゥルーズのなかで後景化していく「平滑」概念とともに精緻化されていく触覚的修辞が『感覚の論理』（1981）、『シネマ2』（1985）において、『触覚』におけるデリダの位置に再度接近していることを示す。

触覚中心主義

デリダの『触覚』は、西洋哲学の歴史を「触覚中心主義」という観点から批判的に検討しており、また本書を、その触覚的系譜の臨界点において思考を続けるジャン・リュック＝ナンシーに捧げている。触覚中心主義とは何か。ここでの問題は自他との関係また真理との距離を無媒介に接続する態度である。例えば、メルロ＝ポンティを中心とする触覚中心主義的な間主観性論は、自他の無媒介で連続的な交流を可能なものとする態度を「触れる」というモチーフが喚起する無媒介性に依拠しながら展開しているとされる。デリダは、この系譜の中に、プラトン、アリストテレス、ベルクソン、メルロ＝ポンティなどの哲学者たちを位置づける。例えば、デリダは触覚中心主義として、ベルクソンとメルロ＝ポンティを「合致 [coïncidence]」、触覚的直接性をわれわれに想起させるような「接触 [contact]」への関心から批判している（TJ141/236頁）⁽²⁾。これに対して、デリダは、ナンシーを筆頭にレヴィナス、フッサール、カントといった哲学者たちの議論を引き受けつつ、「接触の只中における断絶」、「空間化」、「接触の直接性や連続性との断絶」を思考すべく「触覚」の脱構築をおこなうのである。

さて、問題となるのは、第6章「触覚なるものはない」である。この章において、連続主義として厳しく批判されているのが、現象学者アンリ・マルティネ、美学者アロイス・リーグルに由来するドゥルーズ／ガタリの「触知的」概念および「平滑空間」概念である。ドゥルーズ／ガタリは『千のプラトー』第14プラトーにおいて、それ以前のプラトーで展開した平滑空間と条理空間を美学的領域に拡張しながら、触知的／光学的と対で用いている。平滑空間では、遠隔像／条理空間に対して、対象との徹底的な近さ、連続性をもって、「意味＝感覚が近さを我有化するあらゆる場所で、触覚的なものが感覚＝意味全体を潜在的に満たしている」のである（TJ143/238頁）。

このように解釈された触覚的なもの、それを近さに接合す

るもの、それを近さの接近と同一視するもの、それを「近づいた視覚」だけではなく、あらゆる意味でのまた全ての感覚にとっての接近と同一視するもの、それを近さの我有化に伝えるもの、それは連続説の要請であり、欲望の連続主義であり、これはドゥルーズとガタリが、アルトーに従って、「器官なき身体」の名で要求していることの一般的モチーフにこの言説全体を一致させるものである。したがって、この触知的連続主義[continuité haptique]が、その我有化の要素を見いだすのは、むしろ探求するのは「平滑空間」においてであって、条理空間においてではない。まさにそこにおいて、連続主義は、その接近の論理を強調し、滑らかに仕上げるのである。(TJ143/239頁)

このようなデリダの批判に対して、コールブルックは、しばしばみられる生氣論/テキスト主義という粗雑な対立軸を回避しつつも、デリダがフッサールやメルロ＝ポンティといった現象学者たちのリストにドゥルーズを巻き込んでいることに疑義を呈する(Colebrook [2009])。またコールブルックは、現象学とドゥルーズの議論との混同を指摘したのち、触知的概念と同時に議論される戦争機械概念という分散的、破壊的要素をドゥルーズが論じていると主張することで、デリダの批判を中性化し、ドゥルーズとデリダとを対話させることを試みている(同上)。しかし、これはデリダのドゥルーズに対する論点をずらしてしまっていないだろうか。つまり、たとえデリダが「暴力的に」フッサールやメルロ＝ポンティといった現象学者たちのリストにドゥルーズを巻き込んでいるとはいえ、それはデリダにとって「現象学的なレベル」にドゥルーズの議論を貶めているわけではない。問題は、ドゥルーズの「触覚」をめぐる修辞から浮かび上がる、より根源的な「連続説の要請 [postulation continuiste]」、「欲望の連続説」であり、その先に垣間見える「器官なき身体」なのである。

連続説の要請とわれわれはいった。というのは、連続 [le continu] はけっして与えられないからである。連続についての純粹かつ直接的な経験はけっして存在しない。近さについての経験も。絶対的な近接についての経験も。純粹な未分化 [la pure indifférenciation] についての経験も。ましてや「平滑なもの」についての経験も。またしたがって、「器官なき身体」についての経験も。(TJ144/240頁)

デリダによる連続主義批判の根 デリダの器官なき身体解釈から

さて、デリダはドゥルーズの「器官なき身体」読解を「内在」、

「連続」、「未分化」という観点から捉えているが、ここでの背景となる『エクリチュールと差異』(1967)におけるデリダのアルトー読解を確認しておく。

デリダが扱おうとするのは、まずアルトーの固有の生を奪い取ろうとする神＝創作者に対する戦いである。「神」はアルトーが生まれた瞬間に彼の生を剥奪するものとされる。アルトーは彼の経験、詩作、演劇実践を重ね合わせて思考しているのだが、演劇的实践において、「神」とは古典的演劇における作者である。この作者は、起源的な台本＝テキストを書き、舞台に不在のまま、自身の再現前化を舞台演出家や俳優という代理人を用いて行う存在である。古典演劇においては、再現前化によって演出家や俳優は自分自身の言葉、行為を奪われ、作者自身も自身の思考を間接的にしか示すことができない。「神」の支配する古典演劇においては、思考も行為も言葉も全て非連続なものにされているのである。アルトーの経験における「非能力 [impouvoir]」という事態は、「神」の支配する古典的演劇の非連続性を反映するものでもある。アルトーは自身の詩が形式を失い、ばらばらであることの原因を、「自身の思考の諸要素の異常な分離 [la séparation anormale des éléments pensée]」によるものとしているが(ED264/356頁)、その分離は原初の「神」によるアルトーの疎外、彼固有の言葉の剥奪によるものなのである。アルトーは、この非連続性に苦しみ、嫌悪し、神＝作者の疎外的暴力を告発する。

そして、自身の身体経験と演劇的实践を重ねあわせるアルトーにとって、「私の一部が私の身体の外にこぼれ落ちる度ごとにいまだに盗まれ続けているもの」(ED270/366頁)こそ、作品であり、糞便である。「糞便としての作品は物質にすぎず、私から分離するとすぐに壊れてしまうものでしかない(ED273/370頁)。

ただ一方でデリダはアルトーによる神＝作者の形而上学の告発を評価しているのだが、他方で、アルトーの固有＝清潔な身体への欲望を批判する。「窃取をもつばら、あるいは完全に盗みや暴行として理解すること、これこそ主体性(意識、無意識、固有＝清潔な身体)の心理学、人類学、形而上学がおこなっていることである。アルトーの思考の中にもかかる形而上学が働いていること―それも強力に働いていること―にはまったく疑念の余地はない」(ED265/358頁)。

アルトーの身体は原初的に統一を失っており、その中では「器官の差異化が荒れ狂う」のである(ED279/378頁)。器官化＝有機組織とは、機能や手足の分節と接続であり、この差異化が私の固有で清潔な身体四肢を構成すると同時に解体してしまう。そこからアルトーは自身の充足した裂け目のない身体を取り戻すことを欲望する。この欲望こそデリダがアルトーの器官なき身体への欲望と呼ぶものに他ならない。アルトーは自身の肉体を構成するために、身体を閉ざし、器官的構造＝非連続的構造を削減す

ることを欲する。自身から分離していく糞便を保持し、自分と作品を溶け合わせることで崩壊を防ごうとするのだが（ED272/368 頁）、デリダは、アルトーの無欠の固有の身体、器官なき身体への欲望は、常に器官化、文節化によって挫折せざるをえないと批判する。

しかし、ここでデリダがアルトーにただ形而上学的欲望のみをみてとっていたと考えることは早計であろう。確かに、デリダはアルトーの欲望を批判したが、その批判は閉じられた固有性であるところの器官なき身体への追求に対してのものであった。しかしながら、アルトーが残酷演劇の実践における狙いそれ自体について、デリダはある種、両義的な立場をとっているように思われる。「残酷演劇と再現前化の閉域」において、デリダはアルトーの実践について以下のように述べている。

反復としての死を拒否することは、死を、回帰することの無い、現在の消費として肯定することである。〔……〕現在の唯一性を死に付与して現在そのものを出現させようとする純粋な消費、絶対的な気前よさはすでに、現在の現前性を保持したいと望み始めているのだ。〔……〕現在を保持しようと望まぬこと、それは、現在において代替不能で死にゆく現前性を構成するもの、つまり、現在のうちにあって反復されぬものを保護したいとのぞむことだ。すなわち、純粋な差異を享受することである（ED495/495 頁）。

ここでのデリダの批判点はアルトーの現前への欲望ではなく、あくまで現前を保持しようとする彼の態度である。アルトーが保持しようとするものは「代替不可能な死にゆく現前〔irremplaçable et mortelle présence〕」と名指されている。アルトーにとっては、いまここは一回限りの取り返しのつかない唯一性であり、分離、破壊されてはならない価値なのである⁽³⁾。ここにアルトーによる西洋形而上学批判の眼目がある。

しかし、現在の瞬間またアルトーの身体は分離、代替されてはならない特異性をもつが、可死的であり、避け難く消失していく時間の運動の中にある⁽⁴⁾。器官なき身体への連続主義は、その瞬間それ自体の特異性を同一性のもとに縮減してしまうのではないか。そのような論理がデリダにそれとは異なる非連続主義的態度を選択させたのであろう。アルトーの身体論を通して、死にゆく現在、こぼれ落ちていく身体とともに時空間の非連続的要請が浮かび上がってくるのである。以上が、内部への閉じこもり、特異的諸瞬間の抹消、未分化なものへの回帰としての器官なき身体への欲望である。

表 1

特異的諸瞬間	器官化された身体	器官なき身体
保持されえない非連続性	差異化された身体への非連続性	不可能な理念的連続性

しかしながら、デリダのドゥルーズ批判が、バディウによる潜在的な一者-全体批判に同調するものであったとしても⁽⁵⁾、だとすれば何故デリダの批判は『千のプラトー』に限定されているのか。

60 年代ドゥルーズへの肯定

以下ではまずデリダが積極的に評価しているドゥルーズの 60 年代の著作を検討しよう。デリダが明示的に引用をおこなった『ニーチェと哲学』において、展開されているのは端的な連続体批判であり、この段階においては連続主義の影をみることは難しい。「偶然〔hasard〕とともに、われわれはすべての力の関係を肯定する。〔……〕偶然は連続体〔un continuum〕とは正反対のものである。したがって、量化された特定の諸力の遭遇は、偶然の具体的書部分、偶然の肯定的書部分、あらゆる法則と無縁の書部分、つまりディオニュソスの四肢である」（NP50/97 頁）。

これに対して、バディウが潜在的なものの一者 - 全体として批判をおこなう『差異と反復』ではどうだろうか。確かに下記の引用のように『差異と反復』においては、潜在的なものの連続性というテーゼが強く打ち出されているように思われる。バディウがいうように、『差異と反復』は確かに潜在的／現働的という対立軸を構成し、潜在的多様体の連続性からの発生を主題にしている。このとき、下記の引用のように問題・理念と解について論ずる箇所において、あたかも一次的な理念的潜在性から、二次的な非連続的な現働性へという順序が課せられているように見える。

解くということはつねに、《理念》として機能する連続性を fond にして、もろもろの非連続性を産出することなのだ（DR211/上 430 頁）。

ただし、ここで潜在的な領域である多様体はあくまで組織された段階であるということに注目すべきだろう。前述のニーチェ的な連続体批判を維持した上で、あくまでベルクソンの潜在的な契機が、第二の総合でおこなわれていたこと、そして、潜在的なものが「組織〔organisation〕」と呼ばれていることを鑑みた時（DR236/下 46 頁）、むしろここでヒュームを引き合いに出す第一の総合における瞬間と非連続性という真の一次的領域がみえてくる（DR96/上 197 頁）。

習慣の連続性以外の連続性は存在しないということ、そして

てわたしたちは、私たちの構成要素的な無数の習慣の連続性より他にいかなる連続性も有していません、こうした無数の習慣がことごとく、わたしたちにおいて、盲目的な自我や観照的な自我とか、要求者や満足といったものを形成するということ〔……〕。(DR102/上 209-210 頁)

このような非連続性のただなかから連続性を打ち立てようとする傾向は、「バラバラになった肢体が崇高なイメージの重力に惹きつけられてその周りを回るような超人を見出すのである」(DR121/上 248-249 頁)。このような傾向は、器官なき身体が重要な役割をもって登場する『意味の論理学』においても見出すことができる。ここで注目すべきは、深層の音韻／音調、寸断された身体／器官なき身体、恐怖や受動の演劇／能動的な残酷の劇場という二元的な運動である。深層において、器官なき身体はあくまで、ばらばらになっていく物体＝身体に抗する構成的力動性、形態化の力として解釈されるものだ。ただし、その欲望とともに、純粋な実現をとまなうことの困難が指摘されている。「部分なき有機体の理想的な流体が、寄生虫、器官の破片と固体食物の破片、排泄物の残余を運搬していないとは決して確信できない」のである(LS108/上 162 頁)。「未異化＝未分化の物質的モデル〔un modèle matériel indifférencié〕の中に、己の究極的な原理を見出さねばならぬとする先入見」(DR148/上 302 頁)に対する批判をおこなうドゥルーズは確かに、アルトーの器官なき身体を未分化なものへの欲望に回収することを避けているように思われる。

この段階において、アルトーに対する評価のポイントは違うが、デリダとドゥルーズが器官なき身体をめぐる同じ構図を狙っていることがわかる。つまり、未分化な状態を前提としない離散的な状態において、完全なる栄光の器官なき身体への欲望を批判するデリダと、断片化から抜け出そうとする器官なき身体の能動を肯定するドゥルーズである。ここには、その後の展開にかかわる 60 年代における現前の形而上学批判というデリダの哲学的戦略と、ドゥルーズによる動的発生という哲学的プランとの差異がみてとれる。

器官なき身体の前景化

デリダは、先の追悼文において、ドゥルーズに対する肯定的な評価をとりわけ 60 年代のドゥルーズ単独での著作『ニーチェ』、『差異と反復』、『意味の論理学』に与えており、これまでの議論のなかで、それらの著作とデリダの論旨との親和性も明らかになった。これに対して 70 年代以降のガタリとの共著とされる著作に対しては不満を呈していたことを告白している。そこで問題になっているのは、明らかに器官なき身体の連続主義が全面化して

いく過程である⁽⁶⁾。スピノザの実体と称されながら登場する器官なき身体はもはや『意味の論理学』の深層においてもがき続けるアルトーの記述をはみ出してないだろうか。「連合する流れは、それぞれ、理念的なものとして、豚の大きな腿の果てしない流れとして考慮されなければならない。事実、質料は、物質が理念上所有している純粋な連続性を所有している」(AO44/上 73 頁)。「アルトーの場合についてドゥルーズは、「流体的」、「連続的」であるとされていた器官なき身体その流体的・連続性を、理想化している、しすぎているのではないだろうか？」と千葉雅也はドゥルーズのアルトー読解に対して疑問を呈しているが、かつて同様の問いをデリダも投げかけたのではないだろうか(千葉[2013] p. 196.)。

とはいえ、『対象』は流れの連続を前提とし、あらゆる流れは対象の断片化を前提とする」(AO12/上 22 頁)という記述にみられるように、記述上、断片性というイメージは引き継がれており、もろもろの欲望機械と未分化な器官なき身体という二元的極の対立構造が打ち出されているという意味で『アンチ・オイディプス』は、『意味の論理学』において深層の器官なき身体に帰せられていた流れのイメージの全面化にもかかわらず、それに対抗する非連続性という論理が際立っている⁽⁷⁾。

しかし、1980 年の『千のプラトー』の構えは、次の段階へ移っている。始まりから終わりまで連続的なイメージが据えられているのだ。決定的なのは、第 3 プラトーにおいて宣言される「素材」の位置である。素材は、ここで存立平面、また〈器官なき身体〉とも呼ばれているが、まだ形式化されていない、有機的に組織されていない、地層化されていない、あるいは脱地層化された身体＝物質」を指す(MP58/上 100-101 頁)。ドゥルーズは『差異と反復』において自らを遠ざけていた未分化なものの原初性を導入してしまっているかのようなのだ。

ここで連続をめぐるデリダの批判について、「連続的な存在論」と「連続への欲望」に対する態度を峻別しておきたい。デリダは前者の連続的な存在論について端的に「連続はけっして与えられない」と述べている。そして、畳み掛けるように「連続についての純粋かつ直接的な経験」、「近さ」、「絶対的な近接」、「純粋な無記性」、「平滑なもの」、「器官なき身体」、「直接的与件」そうしたものの一切は、けっして存在しないと断言する。この主張はかなり激しいものであるが、文字通り受け取ろう。これは少なくとも『千のプラトー』のドゥルーズと、デリダとの徹底的な断絶を記すものである。

では、「平滑／条理は、信賴の置ける概念的対立をなして」いないとして何があるのか。デリダによれば、それは「観念化された極性、矛盾する欲望の傾向〔la tension d'un désir contradictoire〕であり〔……〕、混合された所与、寄せ集め〔un

mélange]、不純なものだけである」(TJ144/240 頁)。ドゥルーズ／ガタリの議論も、事実上、実体化したというよりはデリダの言う通りに条理化と平滑化という「矛盾する欲望の傾向」であったと読解することは可能である。また、ドゥルーズ／ガタリ自身も「〈器官なき身体〉に人は到達することがないし、できないのであり、ただいつまでも接近し続けるだけ、それは一つの極限なのだ」と述べている (MP186/上 307 頁)。だが、それがあつた種の理念的極をめぐるものであつたとしても、『千のプラトー』全編を通して、強かに質料、潜在性、強度の連続説が展開されていることは他の著作と比較した際に明らかである。「諸々の平滑空間は、確かにそれら自体で解放をもたらすものではない」と述べつつも、即座に「だが、闘争が変化し移動するのはそれら [平滑空間] においてであり、生が新たな賭けへと向かい、新しい障害に直面し、新しいスタイルを発明し、敵を変容させるのもそれら [平滑空間] においてなのである」と主張する際、ドゥルーズはあまりに無防備に平滑空間の連続性を評価する方向に向かっている (MP625/下 297-298 頁)。このようなテクスト的変遷をおつたとき、デリダの連続主義批判の矛先が『千のプラトー』へ向かったことは不可避的であつたと考えられる⁽⁸⁾。

技術的触覚へ

さて、問題はこれ以後のドゥルーズの展開である。というのも、デリダが批判した『千のプラトー』の「平滑」、「触知的」概念は、以後のドゥルーズの議論において後景化していくからだ。『千のプラトー』の翌年に出版された画家フランシス・ベーコン論である『感覚の論理』においてすでに平滑という言葉は姿を消し、視覚的なものと触覚的なものをめぐって、デジタルなもの (le digital)、触感的なもの (le tactile)、手覚的なもの (le manuel)、触知的なもの (l'haptique) が峻別されることによって、議論の精練がなされている (FB145/203-204 頁)⁽⁹⁾。手覚的概念は、視覚的なものの触覚的なものの優位 (デジタルなものや触感的なもの) を廃棄し、分化を徹底的に廃棄する過剰な手の触覚性を指示する概念として機能しているのに対して、「触知的」概念は、手覚的な水準を経過しつつ、視覚的なもの、眼が光学的機能とは明らかに区別される触れる機能を自らの中に見出す、つまり「触覚と光覚の二重性」をとらえうる水準として峻別されているのだ。これは先述の純粋な平滑空間の全面化に対する反省ともみえる。分化した諸感官の再編を可能にするとはいえ、諸差異を抹消する可能性をもつ触覚への回帰としての手覚的概念と、触知的概念を峻別しようとすることで、『千のプラトー』にはなかつた議論構成の慎重さがみられるだろう⁽¹⁰⁾。

表 2

manuel	haptique	digital
全面的平滑への傾向	分化を維持した平滑	完全なるコード化

この語の振り分けはもはや維持されないが、触覚の主題は以後、このように差異を孕んだ触知という含意で持って、1983 年、1985 年の『シネマ 1』、『シネマ 2』において維持されている。ここで、ドゥルーズは、ジャン・リュック＝ゴダールをひきながら映画は「手作業による触覚的な芸術」であると述べ、視覚的なものと音声的なものということなる領域の離接を問題としている (IT307/326 頁)。

視聴覚的イメージを構成するのは、視覚的なものと音声的なものの離接、分離であり、両者の各々は自己自律的であるが、同時に非共約的ないし「非合理的」関係でもあり、それは一つの全体を形成することも、いかなる全体をめざすこともなく、両者をむすびつける。それは感覚運動図式の崩壊から発生する抵抗であり、視覚的イメージと音声的イメージを分離するが、なおさらそれらを全体化されない関係に導くのだ。(IT334/352-353 頁)

時間イメージ後半の議論は明確に、運動イメージにおいて問題となっていたカント的な崇高概念が退けられている。とはいえ、かつてデュオニソスの離散した四肢を想起させるような触覚的な接合が語られていることも間違いない。「音声的なものと視覚的なものが無限遠点で「触れる」」のだ (IT334/353 頁)。マルグリット・デュラスを例にとりながらドゥルーズが分析するこの触覚的契機はある充溢した現前のイメージをすでに捨てている。マルグリット・デュラスを例にとりながらドゥルーズが言及するのは、接触の最中に消失するその臨界点である。

「音声的イメージと視覚的イメージは自己自律性となっても、やはり一つの視聴覚的イメージを構成するのであり、新たな対応がそれらの非対応によって定められた諸形式から生まれるだけに、それはいっそう純粋なのである。両者を関連づけるのは、おのおのの限界である。それは恣意的な構築ではなく、『カンジスの女』におけるように、とても厳密な構築である。この映画において、両者は触れ合うことで消滅するが、両者の分離を維持する限界上でしか触れ合わない ne se touchet que のであり、この限界は「それゆえ超えられないが、それでも、越えられないからこそ常に超えられる。〔……〕 今や直接的となったのは、全体化できず、触れ

合う se touchant ことで死滅してしまう二つの非対称的な面とともにある時間イメージそのものなのである」。

(IT340-341/359 頁) (下線部強調は引用者)

ここで接触はまた「距離とは無関係の接触」(IT364/383 頁)と名指されており、『千のプラトー』においてドゥルーズが触知的と呼んだものに相当するようみえる。しかしながら、ここにおいて、もはやアルトー的な肉の救済は、映画という技術的崇高の論理によって保たれる限界における接触によって、『触覚』においてデリダが称揚していた範型にあまりに近づいている。無論、ある物質的連続体というモチーフは維持されているとはいえ、触覚の修辞をめぐるドゥルーズ自身の練り上げなおしがここでみられるのだ⁽¹¹⁾。

デリダによるアルトー再読

『エクリチュールと差異』所収のアルトーをあつかった論文は器官なき身体批判の要素が強いが、「基底材を猛り狂わせる」(1986)では、器官なき身体批判から離れ、むしろアルトーのデッサンにある種、特異性とのかわりを失わない形態化として評価している。アルトーは内在的な固有の身体を形成することはないが、自身の身体を分断(FS79/76 頁)をおこなうのだ。

わたしは、この単語(絵文字)をとりわけ次のような意味で理解するつもりだ、つまり、[……] 空間と時間との間の境界を横断することに文字通り巧みであるところのもの、軌道という意味においてである。そして、基底材を通して、モチーフの運動が保証するのだ、可視と不可視との、言い換えれば、演劇的絵画と文学と詩と音楽との、連合作用を。全体化なしに、また基底材的な障壁を、この分離を、考慮に入れて。そしてこの分離状態の肉体においては、作品と化した出来事の特異性のしるしがいつまでもくっきりと認められることになる。(FS65/34-35 頁)。

わたしの一部は身体からこぼれ落ちていくが、デッサンは、特異性が消失していくなかで、反復が可能なまとまりを成立させる。それこそ瞬間的特異性がこぼれおちていく分離状態の肉体なのである。更にデッサンは単に過去を担うだけでなく、来たるべき未来とも関わるものである。

デッサンは何ものかを復原するのではなく、単なる穿孔が起きたということを復原するのである。[……] そして、貫通が[……] 約束しているのは、過去の中に失われた対象を再所有することであるよりはむしろ来たるべき新たな生誕

なのである。(FS86/97 頁)

アルトーは普遍的な価値へ瞬間的特異性を従属させるのを拒むがゆえに器官なき身体というかたちでその特異性を保持しようと望んだ。しかし、それは理念性とは異なるかたちで、不可能な経験をひたすら望み、その特異性をみえなくしてしまう欲望となってしまった。そこで 60 年代のデリダが注目したのは充実した栄光の身体ではなく、器官なき身体となることができず、こぼれ落ちる特異的諸瞬間のなかで引き裂かれ、壊れていくアルトーの身体そのものであった。

これに対して、80 年代のデリダが注目するのは、アルトーのデッサンにおける分離された身体の技術的形成である。分離された身体は、そこに不可能な経験に執着し、閉じこもろうとする身体とは異なり、特異的な未来へ開かれながら自身を組み替えていく過程であり、それは不可能なものへの欲望の手前で生き延びることなのである。このような観点は、晩年のデリダが『触覚』において前景化させる触覚と崇高の主題へ繋がり、テクネーや人口補綴という仕方ですべて「超越的な意味も内在的な意味ももたない」物体＝身体の感性論へつながっていくだろう(TJ146/243 頁)。「[……] 構想力は、『自ら自身の無力』を感覚する」ことによって、自らの無力に触れることになる。構想力は、自らができないこと、つまり不可能事に出会う。構想力は、自らにとって不可能事であり続けているものに触れにくるのである」(TJ124/203 頁)。

さて、ナンシーは「[……] 一方[ドゥルーズ]にとって、離接が総合の中に(自己における自己の分割の中に)含まれているのに対し、他方[デリダ]にとっての接合は、そもそもの[d'origine]分割において(起源の[d'origine] / そもそもの場における＝起源の代わりにある[au lieu d'origine]分割において)排除されている[……]」(ナンシー [2015] 195 頁)と述べているが、この 80 年代のデリダのアルトー読解の視点は、接合の不可能性においてこぼれ落ちる諸瞬間ではなく、壊れながらも耐続するただなかの身体を構成するテクネーの問題に移っている。機械的なある技術において、身体の限界を組み替えながら構成される新たな形態。ここにおいて、すれ違ったデリダとドゥルーズは再会するのではないだろうか。

終わりに

まとめよう。器官なき身体への批判が展開された『触覚』は、ドゥルーズとデリダの係争点を明らかにするものであり、それはまずもって連続／非連続をめぐるものであった。それは 60 年代においては、アルトー読解においてみられる同型の構造に対する相反する評価にみてとれる。その反対傾向が最大限に高まったも

のが、『千のプラトー』であり、そこにおいてはドゥルーズの未分化な原初的質料という水準の指定による連続主義の全面化および平滑空間に対する楽観的肯定がデリダにとって問題視され、その展開が『触覚』における器官なき身体への留保なき批判であったと考えられる。ただし、その後、触知的概念の精緻化、平滑概念の後景化とともに、シネマにおける身体なき技術的接触、アルトールのデッサンにおいて、再度ドゥルーズとデリダの理論的距離

は近づいている。

あまりに駆け足でドゥルーズとデリダの歩みを概観してしまった。とはいえ、デリダの圧縮した触覚中心主義への注目はドゥルーズ／ガタリのある特異な瞬間を目ざとく切り取りながら、彼らの間の差異を際立たせようとするものであった。問われるべき主題は無数に残されているが今後の課題とし、本論はここで閉じる。

Notes

1. 本論者は下記発表に大幅に加筆修正を加えたものである。小川歩人「ジャック・デリダにおける技術的身体性＝物質性について」哲学若手研究者フォーラム、2015年。
2. この点に関して、メルロ＝ポンティの両義性をあつかったものについては藤本一勇 [2009]を参照。
3. この取り替え不可能な現在という観点を「幾何学の起源・序説」における「ここいま」という創設のかつ創造的な特異的事実 (IOG31/40 頁)、「代替不可能な事実を備えた歴史的出来事〔une aventure historique dont le fait est irremplaçable〕」(IOG56/86 頁)、『声と現象』における「出来事の今ここ〔*hic et nunc* des événements〕」(IOG84/168 頁)といった表現と共に検討し直す必要があるだろう。
4. 本論では扱えなかったが、『エクリチュールと差異』の中で、瞬間という水準での他化作用としての時間化という主題が扱われている。「コギトと狂気の歴史」において、デリダはデカルトの連続創造説に言及しつつ、その瞬間瞬間の紐帯の不確かさに言及している (ED89/113 頁)。また、「暴力と形而上学」では、メルロ＝ポンティとレヴィナスに言及しつつ、瞬間瞬間の他化作用としての時間作用が問題となっている (ED153/203 頁、ED140/185 頁)。デカルト、ヴァール、レヴィナスの連続創造説との関連については、石井 [2014]を参照。また、デリダの脱構築を根源的有限性と生成の只中において暴力的な時間の他化作用との関係から論じた論考に Hägglund [2008]がある。
5. 例えば、マルタン [2015]は、デリダとドゥルーズの両者を積極的に繋げようとする稀有な存在であるが、デリダは端的にドゥルーズ／ガタリの平滑空間、触知的概念、器官なき身体をうまく理解できなかったのだと述べ、またこれについてバディウとドゥルーズを分かちものでもあると述べている。一面で正しいように思われるが、デリダの批判の本質的点对する応答にはなっていないだろう。
6. その意味で、ジャン・クリストフ＝ゴダールによるデリダとドゥルーズの器官なき身体解釈比較は正当であると同時に正当でない。『アンチ・オイディプス』におけるデリダとドゥルーズの器官なき身体解釈について、ジャン・クリストフ＝ゴダールは、前者をバタイユ、ヘーゲル的な破壊と保存の運動、後者をスピノザの実体あるいはマルティネの美的＝感性的カテゴリーを経由したものと評している。Goddard [2008], p. 97.
ただし、ここでゴダールは、『アンチ・オイディプス』期の器官なき身体解釈をあまりに強調しすぎることで、ドゥルーズ哲学を通底する能動と受動、保存と破壊というニーチェ的二元性を取り逃がしてしているようにも思われる。むしろ初期デリダのアルトール読解から『意味の論理学』における動的発生の問題圏との比較を考えることができる。そこでは『千のプラトー』のような流体モデルが前提とされておらず、むしろ先述の通りクラインの部分対象、アントナン・アルトールの寸断された身体といった非連続な存在論が際立っている。
7. 例えば以下の引用には、先に引用した『ニーチェと哲学』における偶然性と非連続というロジックの主題がみられる。「まず、世界史は、もろもろの偶発的出来事の歴史であって、必然性の歴史ではない。切断と極限の歴史であって、連続性の歴史ではない」(AO163/上 264 頁)。
8. ドゥルーズ／ガタリの『千のプラトー』第 12 プラトー「ノマドロジーあるいは戦争機械」へ目を向けたい。というのも、そこで彼らは遊牧民の冶金術が取り出す「曖昧な本質〔*des essences vagues*〕」をフッサール／デリダの議論を参照しながら、自分たちの議論にとりこんでいるからである。ドゥルーズ／ガタリは、「理念的にして有機的な固定した本質」としての「円」、花瓶、車輪、太陽などの単なる「丸いもの〔*des choses arrondies*〕」から区別される「漠然とし

た滑らかな本質」としての「丸」を「曖昧な、つまり放浪的なあるいは遊牧的な形態の本質〔des essences morphologiques vague, c'est à dire vagabondes ou nomades〕」と呼び、積極的に評価している（MP454-456/下43-45頁）。そして、ドゥルーズ／ガタリが単なる形相と質料でなく、その間の中間的な領域をカント的図式と形容していることも、デリダが同領域を想像力＝構想力の領野とみなしていることと関連するだろう。また、ここでドゥルーズ／ガタリは、フッサールが曖昧な本質を極限化の運動へ従属させようとすることに疑義を呈している。そして、徹底的に極限化へ向かおうとする王道科学と曖昧な本質に注目し、王道科学の内容を逃走させようとする遊牧科学との間の相互作用の場、「絶え間なく流動している両者の境界」の重要性を指摘するのである。これはまさしく、デリダが記述した極限化を目指すカント的意味での理念と曖昧な形態論の類型との運動性に他ならない。

ただし、ドゥルーズがフッサールを引き継ぎながら、「流れとしての物質」として「曖昧な本質」を描いていることに注目すべきである。遊牧科学が取り出す「曖昧な本質」は、シモンソンの形相＝質料モデル批判と並んで、「形相と質料のあいだの中間的媒介的な帯域」、「エネルギー的、分子的帯域」を引き出すものとして提示される。そして、その際、モデルとして特権的に扱われるのは、北方の蛮族のマイナー科学、冶金術であり、金属の非有機的生命としての流体性こそが「器官なき身体」として描かれる（MP510-512/下127-129頁）。注の内容から明らかにこのフッサール読解はデリダを参照しており、デリダが『触覚』においてこれを取り扱わないのはいささか不自然であろう。これはむしろ形態論の本質についての議論が想像力論と組み合わせりながら、デリダの理論的に立場において重要であることを示していないだろうか。

9. 『触覚』におけるデリダのマルティネに対する態度は極めて曖昧であるが、デリダはマルティネがある種触覚主義的伝統のうちにあることを示唆しつつも、彼のメルロ＝ポンティ読解が、むしろデリダの評価するレヴィナス的な愛撫の主題へ向かっていくことを指摘している（TJ102/178頁）。また、小倉 [2015]によれば、『感覚の論理』で展開されるマルティネのリズム論において、バンヴェニストによるリュトモスの議論が参照されているが、これは「散種」においてデリダが展開していた主題である（DIS221/284-285頁）。マルティネの議論がより精緻に展開される『感覚の論理』との関係を踏まえて今後精査される必要があるだろう。
10. 『千のプラトー』第14プラトーではポロックの抽象線の特徴をマイケル・フリードからひきつつ、触知的なものとみなしているが、『感覚の論理』において、ポロックはもはや手覚的な抽象表現主義の代表格として、触知的概念を割り振られることはない。ここにも、『千のプラトー』における樂觀主義が垣間見える。
「抽象線とはむしろマイケル・フリードが、ポロックのいくつかの作品について定義しているような線だろう。多方向性で、内部も外部も持たず、形も背景も持たず、何も限定しないで輪郭を書かず、染みや点のあいだを通り、平滑空間を満たし、触知的かつ近接的な視覚的素材をかきまぜるだけで、「みるものの目を引きつけると同時に決して落ち着く場を与えない」線（《Trois peintures américains》 in Peindre, pp. 267 sq.）。カンディンスキー自身の場合、抽象作用が実現されるのは幾何学的な構造によってではなく、モンゴル遊牧民のモチーフに結びつく歩行や行程の線によってである」（MP624/下366頁）。
11. ここで『哲学とは何か』において鍵概念となるバルクソン由来の仮構作用概念が問題となっていることは重要である（IT364/383頁）。また、運動イメージの終わりとともに崇高概念から距離をとりつつも、時間イメージにおいて再度、離接的な接触という極めて崇高的な論理を導入する際に、構想力が破綻する臨界地点を描き出すために構想力との決別を図り、バルクソンへ向かうドゥルーズの態度と、あくまでカント的主題系にこだわるデリダとの哲学的背景の差異がみえる場面である。『哲学とは何か』における仮構作用については小倉 [2016]を参照。

文献表

- Colebrook, Claire [2009] Derrida, Deleuze and Haptic Aesthetics, *Derrida Today*, Volume 2 Issue 1, pp. 22-43.
 Deleuze, Gilles [1962] *Nietzsche et la philosophie*, PUF/『ニーチェと哲学』江川隆男訳、河出文庫、2008年（NPと略記）。
 ——— [1968] *Différence et répétition*, PUF/『差異と反復』（上・下）財津理訳、河出文庫、2007年（DRと略記）。
 ——— [1969] *Logique du sens*, Minuit/『意味の論理学』（上・下）小泉義之訳、河出文庫、2007年（LSと略記）。
 ——— [1985] *Cinéma, tome 2. L'image-temps*, Minuit/『シネマ2＊時間イメージ』宇野邦一他訳、法政大学出版局、2006

- 年（IT と略記）。
- [2002] *Francis Bacon, logique de la sensation*, Seuil/『フランス・ベーコン 感覚の論理学』宇野邦一訳、河出書房新社、2016年（FB と略記）。
- Deleuze, Gilles et Félix Guattari [1972] *L'Anti-Œdipe. Capitalisme et schizophrénie*, Minuit/『アンチ・オイディプス——資本主義と分裂症』（上・下）宇野邦一訳、河出文庫、2006年（AO と略記）。
- [1980] *Mille Plateaux. Capitalisme et schizophrénie 2*, Minuit/『千のプラトー——資本主義と分裂症』（上・中・下）宇野邦一他訳、河出文庫、2010年（MP と略記）。
- Derrida, Jacques [1962] *L'origine de la géométrie d'Edmund Husserl*, Introduction et traduction, PUF/『幾何学の起源』田島節夫・矢島忠夫・鈴木修一訳、青土社、1976年（IOG と略記）。
- [1967] *L'écriture et la différence*, Seuil/『エクリチュールと差異』合田正人・谷口博史訳、法政大学出版局、2013年（ED と略記）。
- [1972] *La dissémination*, Seuil/『散種』藤本一勇・立花史・郷原佳以訳、法政大学出版局、2013年（DIS と略記）。
- [2000] *Le toucher*, Jean-Luc Nancy, Galilée/『触覚、ジャン＝リュック・ナンシーに触れる』榊原達哉・松葉祥一・加國尚志訳、青土社、2006年（TJ と略記）。
- [2003] « Il me faudra errer tout seul » dans *Chaque fois unique, la fin du monde*, Galilée, pp. 235-236/「これからわたしは一人でさまよわねばならない」、『そのたびごとにただ一つ、世界の終焉』第II巻、土田知則・岩野卓司・藤本一勇・國分功一郎訳、岩波書店、2006年、117-137頁（CFU と表記）。
- Derrida, Jacques et Paule Thevenin [2000] « Forcener le subjectile » dans *Antonin Artaud Dessins et Portraits*, Gallimard/『基底材を猛り狂わせる』松浦寿輝訳、みすず書房、1999年（FS と略記）。
- Goddard, Jean-Cristophe [2008] *Violence et Subjectivité Derrida, Deleuze, Maldiney, Vrin*.
- Häggglund, Martin [2008] *Radical Atheism: Derrida and the Time of Life*, Stanford University Press.
- 石井雅巳 [2015] 「瞬間・メシア・他性——『実存から実存者へ』の時間論分析——」、『哲学の探求』第42号、哲学若手研究者フォーラム、315-334頁。
- 小倉拓也 [2015] 『ジル・ドゥルーズの哲学における意味と感覚の理論についての人間的な研究』、大阪大学人間科学研究科。
- [2016] 「老いにおける仮構 ドゥルーズと老いの哲学」『at プラス 特集 臨床と人文知』第30号、太田出版、66-81頁。
- ジャン・クレ＝マルタン [2015] 「ジャック・デリダ没後10年 ドゥルーズとデリダ、両者の運動は同じではない」大江倫子・西山雄二訳、『人文学報・フランス文学』第511号、首都大学東京人文科学研究科、31-42頁、<http://hdl.handle.net/10748/7042>. (2017年3月31日)
- ジャン・リュック＝ナンシー [2015] 「パラレルな差異」柿並良佑訳、『現代思想 2月臨時増刊号 総特集 デリダ』第43巻、第2号、青土社、188-201頁。
- 千葉雅也 [2013] 『動きすぎではいけない ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』、河出書房新社。
- 藤本一勇 [2009] 「メルロ＝ポンティの「手」——現前と非現前の形而上学』、『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第5巻、第2分冊、早稲田大学人文学研究科、21-34頁。